

第八章 終戦後の石焼きいも

◆ 石焼きいもの元祖

太平洋戦争後の大混乱期が過ぎてからのことである。東京都墨田区向島の三野輪万蔵さんみのわまんぞうが、特製のリヤカーを引きながらの焼きいも屋を始めた。

わたしはそのやり方を、既述の「川小商店」かわこ二代目社長、齋藤直衛さんから聞いている。

「戦前の万蔵さんのことかね？ 屋台売りのラーメン屋だったらしい。戦後の昭和二十五年に、サツマイモの国家統制が解除された。それを待っていた万蔵さんがおもしろいことを始めた。

それは特製のリヤカーを作り、それでサツマイモを焼きながら東京の町の中を売り歩くことだった。うちはそこにもサツマイモを卸していたから、万蔵さんはお得意様だった。

万蔵さんのリヤカーには、小石をいっぱい詰めた鉄板製の大きな箱が載せてあった。それでも潰れない頑丈なりヤカーを、知り合いの町工場に作らせた。火床はその鉄箱の底にあった。燃料は建築現場などから出るタダ同然の廃木材だった。

そして最初はチリン、チリンの鈴を鳴らしながら住宅街をまわった。それがやがて『イシヤーキイモ』の売り声になった。

万蔵さんがそれを考案して新しい商売を始めたときは、五十歳ぐらいのときだった。それ

が当って良く売れた。それで毎年、特製リヤカーの台数を増やしていった。もちろん、それを借りて売り歩く売り子も増やした。その多くは、越後の豪雪地帯の稲作農家の主人たちだった。

東京では万蔵さんの新商売が当たったから、そのあとに続くあたらしい親方連中が急増した。だが盛時は一九七〇（昭和四十五）年の大阪万博までだった」

その後、リヤカーの石焼きいもは下火となり、軽トラなどで売る移動販売車の「石焼きいも屋」に変わった。しかし以前ほどに焼きいもは売れなくなっていた。そのような時代を経て、平成の時代になり、二〇〇〇年代にねっとりして甘い安納芋ブームが起こり、二〇〇三年頃に電気式自動焼きいも機が開発された。同時にねっとりした品種の「べにはるか」が二〇〇七年に登場した。やがてこの大型量販店でも、店内の目立つところに電気式自動焼きいも機を設置するようになった。それで石焼きいもの引き売りは消えていった。



◆戦後の川越地方のサツマイモ畑

関東大震災で消えた川越地方の販売用サツマイモ畑も、太平洋戦争による食糧難時代に復活した。「なにがなんでもサツマイモをつくれ」となり、小学校の校庭まで開墾されてサツマイモ畑になった。

そんな頃のことである。紙不足で薄くなりながらも発行されていた朝日新聞社の少年向き全国誌「週刊少国民」の一九四四（昭和十九）年九月二十四日号の表紙写真は、川越第四国民学校（現・川越市立仙波小学校）の校庭を開墾して作ったサツマイモ畑の収穫風景だった。それに「僕らが作った学校農園のおいも」とか「ふやせ食糧、つくれ笑顔」の文字が入っていた。

川越地方のサツマイモは、そのような宣伝にも使われるほど有名だった。そして戦後もしばらくたつと、戦前のおいしかったサツマイモ「紅赤」の復活の兆しも出た。だが、うまくいかなかった。

夏作のサツマイモと相性が良かったのは、冬作のムギだった。その大麦畑も小麦畑も、戦後は年々少なくなつた。最良の相棒を失った「紅赤」は、病虫害に悩まされるようになり、作り手も消えた。

それに代わる新しい作物になつたのが、ハウレンソウやカブ、小松菜などの葉物はものとイモはイモでもサトイモだった。それらは東京に隣接している川越地方の畑作専門農家の作物として、令和になつた今も盛んに作られている。

そのような流れの中で「令和」の今も、サツマイモにこだわり続けているところとなれば、

三芳町上富地区^{かみとめ}の約三十戸の農家「三芳町川越いも振興会」と、川越市内のいも掘り観光農園を中心とした「川越いも研究会」の生産農家ぐらいいしか見当たらない。

